六　安城キャンパスから東山へ　―農学部

◆創設当初からあった農学部設置構想

三章でもふれましたが、「緑のトンネル」を抜けた左手に農学部の建物があり、さらにその奥には小さな農場などがあります。

農学部は、情報文化学部を除く名古屋大学八学部の中では一番遅く設置されたのですが、農学部の設置自体は、じつは名帝大創設時の最初から構想されていました。昭和十二（一九三七）年一二月に愛知県会で可決された名帝大の設置の意見書「綜合大学建設方に関する件」には、「満州」「支那」において活躍するための人材養成が創設理由の一つにあげられていました。それをうけてか、一九三八（昭和一三）年一月の『名古屋新聞』にも、農学部設置の具体案として「岐阜高農（＝岐阜高等農林学校）の昇格を断行して、綜合大学の一部門とし、満州国政府と北支政権から土地の無償提供をうけて、国策的な大演習農場・演習林として、北海道帝大が所有林からあげる純益金を経常費の一部にあてているごとく、生産即教育の殿堂を実現し、講座は農業・畜産・林業・農芸化学の四つにする」と書かれています。財源として満州に演習

林をもらい、その収入で大学経営をしようという構想です。戦時下、財政が十分ではないという状況下での、苦肉の策であったと思われます。また同年三月に衆議院本会議で可決された「名古屋帝国大学設立に関する建議」においても、農学部の設置が求められていました。

◆紆余曲折、遅れる農学部設置

その後も各界で農学部設置運動が展開されましたが、しかし結局同年六月に決定された名古屋帝国大学設立準備調査会の決定要項では、農学部ははずされてしまいました。なお、名帝大創設後の昭和十八（一九四三）年度にも農学部設置の予算を作成して文部省に提出しましたが、農学部志望者が少ない・南方開発は農学士ではなく、高等農林学校卒で間に合う・経費不足などの理由で認められませんでした。

敗戦後、すぐに取り組まれた新学部創設の動きの中でも、前述した文系三学部とともに、農学部も入っていました。最初は、戦前と同じように岐阜農林専門学校（岐阜農専、一九四四（昭和一九）年四月に岐阜高等農林学校を名称変更）を包括して、春日井市にある旧陸軍鷹来工廠跡地を農場にしようというものでした。しかし、岐阜農専側には名大に合流せず単科大学として昇格する動きもあり、一九四七（昭和二二）年一〇月の新学部創設委員会では、ひとまず農学部設置ははずされまてしまいした。その後、大学の設置は一府県一大学とすることなど

を定めた「国立大学設置一一原則」が出され、また一九四八（昭和二三）年六月に出された「国立新制大学実施要領」で「国立新制大学における学部又は分校は他の府県に跨らぬもの」と規定されたため、岐阜農専を新制岐阜大学の基礎としよう動きもあって、一九四九（昭和二四）年二月の名古屋大学評議会で、岐阜農専の包括は事実上不認可となりました。

◆農学部の設置

新制大学設置には間に合いませんでしたが、農学部設置への努力はその後も続けられます。七月の名古屋大学協議会で碧海郡安城町にある愛知県立安城農林高等学校（旧安城農林学校、現安城市池浦町）などを基礎として農学部創設委員会を設置することが決定されます。安城は「日本のデンマーク」とも呼ばれる農業先進地域でした。安城町や愛知県は名古屋大学農学部創設に対して積極的で、焼失して復興したばかりの安城農林高等学校のみでは農学部施設としては不十分と判断、これに加えて同じ安城町にあった愛知学芸大学安城分校（旧愛知青年師範学校、後愛知学芸大学附属中学校が置かれました。現安城市新田町小山の安城市立総合運動公園付近）の敷地を譲り受けることが考えられました。ところが、安城農林高等学校施設・農場の方は、教育学部附属実験高等学校職業課程を併置するとして位置づけられてしまった（ただし、結局これは実現しませんでした）こともあってか、結局農学部には包括されませんでした。

【図 20】1954 年頃の安城キャンパス（富田武氏所蔵）

東加茂郡加茂村（現豊田市）と南設楽郡鳳来寺村（現南設楽郡鳳来寺町）にあった同校の二つの演習林のみが転用され、先の愛知学芸大学附属中学校の校地・施設に、安城町から寄附された付近の土地を農場として併せ、一九五一（昭和二六）年四月にやっと設置の運びとなりました（安城キャンパス）【図20】。

その後一九五三（昭和二八）年には豊川分校が廃止されたためその跡地を農場として、また一九五五（昭和三〇）年七月には北設楽郡稲武町にある共有林を演習林として利用できるようになり、さらに一九五九（昭和三四）年二月には北設楽郡設楽町に草地研究施設が発足しました。

◆孤立する安城キャンパス

しかし他の学部が、分散していたとはいえ、ま

がりなりにも名古屋市内にあったのに対し、農学部の学生は教養課程を終えると、名古屋より遠く安城へと赴かなければなりませんでした。そのため、他学部の授業への参加や他学部の図書・実験機器の利用が困難であること、他学部の教職員・学生との接触が少ないこと、通学やアルバイト上不便であること、部活動やサークル活動への参加が困難であること、などの理由により、学生自治会・大学院学生会・職員組合などから、東山移転の要請が出されました。

もとより大学側も、農学部のこのような状況に無関心ではありませんでした。たとえば当時教養部の教員でした牧島久雄さん（のち学生部次長）は、一九五八（昭和三三）年四月に、農学部一年生対象となっている自らの授業時間を割き、アンケート調査を含めたガイダンスを行ったり、別に安城キャンパスへの学部見学を実施して、農学部生の問題に取り組んでいます。ちなみにこの農学部ガイダンスは、翌年からは各学部別のガイダンスへと発展しています。

当時の名古屋大学整備委員会では、農学部は安城キャンパスで完成することとされていましたが、このような状況もあって教授会でも農学部のキャンパス問題が検討され始め、一九五五（昭和三〇）年頃から、農学部整備委員会で農学部の東山移転が議論され始めるようになりました。そして一九五九（昭和三四）年伊勢湾台風で農学部建物施設に甚大な被害を受けると、翌年には農学部の東山移転が正式に公表されるようになりました。

◆農学部の東山キャンパス移転

しかし農学部の移転には難問がありました。当時の文教予算では、各大学で特定の土地を財源として差し出せば、それに見合う建設予算が計上できることになっていました。農学部は土地として安城キャンパスと豊川農場を持っていましたが、安城キャンパスは名古屋大学のキャンパスとして安城市が国へ寄附したものであるため、使用目的が変更されれば、安城市へ返却すべき土地でした。ですから財源代替地として安城キャンパスを差し出すことは不可能でした。一方豊川農場を国へ差し出せば、農場のない農学部となってしまいます。このため農学部は、農場の移転先の敷地を、まず探さなければならなかったのです。

その頃、ちょうど愛知郡東郷村にあった東海近畿農場試験場栽培第二部東郷試験場が、愛知用水の完成とともに試験研究が終了したため、その後の対応が問題となっていました。そこで農林省から名古屋大学への管理替を申請し、一九六二（昭和三七）年三月に東郷農場を誕生させました。このようにして農場問題を克服、一九六六（昭和四一）年四月に農学部は東山移転を完了しました。農学部の移転をもって東山移転はひとまずくぎりがついたことになりました。